

## 2005年度 森村・川村ゼミ議事録

10月19日分

記入者:石原桃子

司会者:豊島典明

文献:Hannah Higgins『Fluxus Experience』Ahmanson-Murphy Fine Arts Book S.2002  
Chapter3 Experience in Context: Happenings, Conceptual, Pop Art

発表グループ:深井・藤村・元島

### 議題

「フルクサスはアートか(→自分にとってアートとは何か)」から議論開始

### グループの考察

今回の発表では、フルクサスと同時代における「ハプニング」、「コンセプチュアルアート」、「ポップ・アート」との関係性を見てきた。フルクサスは、芸術を日常へと溶け込ませようとしたが、ポップ・アートのような商業的でない、取るに足りないと思われるような「日常」を突きつけられることは、私たちの日常に対するおもしろさや新たな発見のきっかけとなる。また、フルクサスは比較した3つの活動のどれにも属するものではなく、「アート」という括りからもはずれた自由なスタイルであった。その言葉が意味する精神は、今なお形を変えながら存続しているのではないだろうか。

### 議論の展開

フルクサスは「アート」とひとくくりにはできないようなものではない

↓では、それぞれにとっての「アート」とは？

- ・「アート」はもっと崇高なものである
- ・フルクサスの作品が与えるワクワク感は、「アート」だと考える
- ・かつての「アート」という形を残していないけれども、「アートの」要素がある

フルクサスは他のアートのように年表に載っていない→「流動的」だから？

しかし、私たちが歴史を振り返ったとき、どこにフルクサスを入れるのか

→一種の「アート」という制度を前提として考えている

逆に、「アート」でないものとは何か

「日常」というもの自体がとても複雑である

- ・フルクサスは「日常」のものを扱っていても、それは私たちが普段の生活で考える「日常」とは全く異なっているものなのかもしれない・モノそのものではなく、フルクサスの作品や行為から伝わる概念が、私たちの「日常」につながる部分である

## 記入者の考察

今回はまた、「フルクサスがアートであるか」という議論が行われた。フルクサスはその活動において「日常」を意識していたことは確かだが、やはりそれは私たちが普段生活している「日常」とはあまりにもかけ離れたものであるように思う。いくら「日常」を意識した作品や行為であっても、日常生活と全く同じ文脈で「フルクサス」を捉えることは難しく、その意味で私はフルクサスを「アートの一形態」として見てしまう。

今回は議論の時間があまり取れなかったが、来週は3回にわたって発表してきたフルクサスの総括である。もう一度各章で述べられていた内容を確認し、今までの議論を踏まえながら有意義な議論ができるようにしたい。